
ふたりで宝探し

竜騎士そらら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたりに宝探し

【Nコード】

N9435T

【作者名】

竜騎士そらら

【あらすじ】

鮎川彩奈。こいつは俺のクラスメイトで、ちょっとばかり変な趣味を持つ美少女だ。ある日俺は彩奈から、素晴らしくも面倒なお誘いを受けることになった。「一緒に死体を見に行こう」と

ある休日のこと。

朝からあいにくの雨だったが、俺、浅野大吾には特に予定などは無く、自宅の二階にある部屋で昨日買ってきた週刊のニューズ雑誌のページをめくりながらこの一日をどう過ごすかに思いを巡らせていた。

目当てのページはすぐに見つかった。中東情勢の現地リポート。大規模な武力衝突があり、その様子を現地に派遣されたりポーターが事細かに報告している。俺は記事の文章には目もくれず、真っ先にそこに掲載された写真を見つめた。

政府軍と反政府ゲリラの銃撃戦の様子。敵の銃弾に撃ち抜かれた兵士。運悪く戦闘に巻き込まれた民間人の死体。戦場で見られる諸風景を、カメラがあらのまま切り取る。

素晴らしい。

思わず口に出して言うてしまった。素晴らしい。不謹慎かもしれないが、素晴らしい。

蜂の巣にされた死体。撒き散った脳髄。親しい者の死体に泣きすが人。

ああ、素晴らしい。戦場写真こそ人類の生み出した究極の至宝。ジャーナリズムの花形。なんて愛おしい……………。

と、不覚にもハイになってしまった。だが好きなのだからしかたあるまい。

俺は戦場写真が好きだ。高校生としては、というか一般的に変な部類に入る趣味かもしれないが、あまり気にしない。とにかく好きなのだ。戦争という非日常で起こる出来事を切り取った写真が。

ついでに言うと、俺は決してミリオタではないから、兵器とか銃

器には全く興味が無い。クラスに、武器についてやたら詳しい奴と
がいるが、あんなのと一緒ににはしないでほしい。

ぱらりとページをめくる。また別の写真。手榴弾の直撃を受けて
胸がちぎれた兵士。下半身と生き別れになった上半身は、切り口か
ら腸をまき散らしている。

今日は一日中、こんな写真を見続けて過ごすのもいいかもしれな
い。そんなことを考えていると、誰かの来訪を告げるチャイムの音
が聞こえた。せつかくいい気分だったのに……。まあ、家人の誰か
が応対してくれるだろうとは思いつつ、客人の顔ぐらいいは拝もうと
部屋の窓から外を見ると、

「あ……浅野君……」

よく見知った人がこちらに手を振っているのが見えた。

「それで……なににきた……」

ぜいぜいと肩で息をしつつ俺は来訪者に尋ねた。なぜ息切れなど
しているのかといえば、来訪者の正体を確認した次の瞬間には脱兎
のごとくの勢いで階段を駆け下り、インターホンの前に立っていた
母を押しのか客人に二言三言話して接続を切る。この動作を準備な
しに一息でやってのけたからだ。いや、むしろ心因性のものかもし
れない。予期せぬ来客にそれはもう心臓が止まるかとすら思った。
なにせ……。女の子が俺を訪ねて家までやってきたのだ。家族の
誰かに知られたらちよつと面倒だ。ていうか恥ずかしい。そんなウ
ブな心情も察してほしいな。

それはともかく。今俺は玄関先で客人と対面している。

「あのね、浅野君」

客人——俺と同じ歳の女の子——はどこか楽しそうに、先の俺の

質問に答えてくれた。

「この近くで、バラバラ死体が見つかったんだってっ！」

うん。そんなことだと思ったよ。

鮎川彩奈。俺のクラスメイト。もの静かな女で、けっこうかわいい。性格もいいから、男女問わず人気がある。

なるほど。その評価は彩奈のことを的確に表現している。ただし一面的でしかない。少なくとも俺の知っている彩奈は周囲からの認識よりもほんの少し活発で明るくて、そして知る人ぞ知る……というか知る人なんてほとんどいないような、ある特殊な嗜好を持っていた。つまり、例えばバラバラ殺人の話に目を輝かせるとか。そう。彼女は無類の死体好きなのだ。

「バラバラ死体？ それは………穏やかじゃないな」

「うんっ！ めったにないことだよね」

声を弾ませてる。こいつ穏やかじゃないの言葉の意味取り違えてるな。

「ねえ浅野君、死体だよ！ しかもバラバラのっ！ 見に行こうよ死体！」

わかった。わかったから死体死体と連呼するな。かなり近所迷惑だ。

人によって、例えば本を読んだり、音楽を聞いたりして楽しんでいる。それが彩奈の場合死体の鑑賞なのだろうか。その心理について俺にはよくわからないが、彩奈は真の意味で死体好きだ。そのことを知っている人間はごく少数だろう。たとえば彩奈の親し

い友人でさえも知らないはずだ。なぜなら、本人が隠しているから。その気持ちはわからなくもないが、だが俺は彩奈の嗜好を知っている。クラスで俺だけ。オンリーワン。全然うれしくないけど。

なぜ俺だけは特別なのか？ それはもちろん、ある日突然、婉曲的にカミングアウトされたからだ。戦場写真が好きな浅野君なら、この趣味だって理解してくれるかもしれない。そう思ったのだ。

その推測は正しい。だが、俺にとってはいい迷惑、だった。想像してほしい。女の子からデートに誘われて舞い上がっていたのに、その行き先たる某美術館で展示ケースにずらりと並んだ大量の死体を見せつけられた時のあの心情を。あれはかなりの恐怖体験だった。まあ、最終的には俺が彩奈の思いと趣味に気付いてその場は丸く収まったが、これが俺以外の人、つまり写真を通じてですら死体を日頃見慣れない人間だったら、ブチギレて二度と口をきかないなんて事態もありえたわけだ。単なる嫌がらせにしか見えないものな。

話が長くなったが、彩奈がどんな奴かはわかってもらえたか。そして今、彩名は自分と同じ趣味を持っていると思いついて（あながち間違いない）、俺をバラバラ殺人事件という一大イベントに誘ってくれているのだ。

まあ、実を言うと、俺も興味があるからちょっと嬉しいのだが……。

いまだ飽きずに降りしきる雨の中、アスファルトの地面にできた水たまりをよけながら、二つの傘が並んで歩いている。一つが俺の、もう一つが彩奈のだ。

……いや。水たまりをよけているのは俺だけだ。彩奈はというと携帯のニュースサイトを見るのに夢中で水たまりに足をつっこ

んだり、電柱にぶつかったりしてそのたびに俺に軌道修正させられている。面倒だが、それでもさっきの興奮した状態よりずっとましだ。

普段の彩奈は、もっとおとなしい。きっと重大イベントに我を忘れたのだろうな。

「……なあ彩奈。今は歩くのに専念した方がいいんじゃないか？」

犬の散歩をしていた近所の小学生とぶつかりかけた彩奈を引っ張りながら、俺はとうとう提案した。だってこの作業、かなり面倒なんだから。

「……そうだね」

彩奈はそんな返事をしつつも液晶画面から顔を上げる気配が全くない。こいつ人の話聞いてないな。よし、攻め手を変えよう。

「……彩奈……なにかわかったか？」

「ん……なんにも」

「おいおい……」

「警察の公式発表がまだだから、マスコミも詳しいことがわかってないんだ。つい一時間ほど前にわかった事件だから、しかたないか」

「……なんでそんな事件のことをお前が知ってるんだ？」

「柴田さんが朝のジョギングの途中でみつけたんだって。だから、第一発見者」

「柴田さんって誰だよ……」

「お父さんの部下」

「ふうん……」

柴田さんなる人がこのあたりでジョギングすることに疑問をはさむつもりはないが、休日に偶然見かけた殺人事件を上司の娘に教えてあげるというのは微妙に変な話の気がした。まああえて詮索することではないのだろうけど。

「……それで、事件現場ってどこだっけ？」

「この近くの市民公園に森沿いの散歩道があるよね？ そこ」

「そっか……」

普段は休日ともなれば家族連れがピクニックとかに出かけ、お弁当を広げたりキャッチボールするような場所だ。そんなのどかな場所で殺人事件があったわけだ。……………いや別にそのことに感慨は無いのだが。

とにかく、俺達は一路目的地を目指すのだった。

「あ……、やってるやってる」

「こら。そんなこと言わない」

人がひとり死んだ場所で、しかも警官の方々が仕事をしているのをさしてやってるやってるとはちよつと不謹慎だ。まあ言いたいことはわかったが。

現場のまわりを黄色いテープで囲んで、その中でレインコート姿の警官達がせわしなく動いている。野次馬の数は少ないが、早耳なマスコミ関係者の姿がいくつも見受けられる。パシャパシャと写真を撮ったり、やっぱりレインコート姿のアナウンサーのお姉さんがテレビカメラの前でなんか喋ったりしていた。

確かに、”やってるやってる”な雰囲気ではあった。

雨は依然として降り続いて、むしろその勢いは増している。野次馬を遠ざけているのはこれか。

「ねえねえ、死体は？」

はいはい。思う存分見ればいいさ。

立ち入り禁止と書かれた黄色いテープで囲まれた境界まで近付い

た。さすがにこれを越える気にはなれない。

散歩道、というか土の地面に血痕が点々と……………いや違うな。

なんか盛大に血の海が広がっていた、のだろう。地面に吸収されて雨に流され、跡が残っているだけ。それで、肝心の死体は……………、

「無いな」

「えー、なんで？」

「なんでって……………」

無いものはしかたがない。

現場には死体らしいものは無い。おそらくはすでにしかるべき場所を持って行かれたのだろう。

「まあ……………なんというか、残念、だったな」

「やだ」

「やだって……………おいおい……………」

「やだ。死体見たい。バラバラ死体。ねえ、その死体今どこに——むぐつ」

警官が不審そうにこっちを見つめているのに気付いて、俺は慌てて彩奈の口を塞いだ。警察の目の前で死体を見たいなんて言うのはやめましよう。

まわりから向けられる不審と奇異の目に愛想笑いを返しながら、彩奈を連れてその場を離れた。

「ここまでくればもう大丈夫か」

最悪、警官に追いかけられる覚悟までしたが、そんな気配はない。ふざけた高校生二人組の相手なんかする暇はないということか。

俺達は今、まだ市民公園の敷地内にいた。事件の現場となった森沿いの散歩道を、来た道と反対側に逃げた。

死体がすでに持っていっていたのは残念だが、実のところもっ

と早くに来ていても見られたかどうかは怪しいものだった。どうせ、死体には青いシートがかぶせてあって見ることもなんてできなかっただろう。現場にあったテレビカメラも、当然死体なんて撮らない。万が一死体がテレビに映ってしまえば、視聴者から大量の苦情がくるから。いわく、死者を冒瀆しているとか、あんなものを映す者の良識を疑うとか。

忌むべきもの。見ないようにするべきもの。これが、ほんの前までは人間だったものに対する世間の態度だ。死者を直視するのを拒むほうが、もっと冒瀆なんだろうと思うが。

まあ、見たくないという人はいるだろうし、わざわざ死体を見たいという輩がいるのも考えものだが。

さて、その考えものの輩はといえば、再び携帯電話の画面を見つめていた。

「警察が記者会見したよ」

「そうか」

「被害者は若い女性。遺体の損傷が激しいけど、財布の中から身元がわかるものは出てきたって。遺族による確認はまだ」

財布が残されていた。つまり物取りではないということだ。当然か。物取りだったら死体を傷つけたりしない。

「それで遺体の状況だけど、現場にあったのは胴体と右手の手首まで。少し離れて右足首と左手の親指、中指が見つかった」

「まさにバラバラ死体か。他の部分は見つかっていない？」

「そうだね。左腕とか頭とか。あ、胴体はね、お腹が切り裂かれてて中のものがいくつかなくなってたって。えっとね、腸、肝臓、子宮、左の腎臓、それから……」

「いや。もういい。だいたいわかった」

あまり聞いて楽しい話題ではない。彩奈はものすごく楽しそうだが。

「ねえねえ、見つかっていない部分って、今どこにあるのかな？」

「さあ……………それは、犯人が持って帰ったか、別の場所に捨てたかだろうな」

「探そうよ」

……………はい？

「死体、どこかに捨ててあるかもしれないんだよね？ だったら、探そうよ」

なんと。そこまでして死体が見たいのか。

さてどうしたものか、と考えるまでもなくこたえは決まっていた。彩奈は俺が断ったところで一人で探そうとするだろうし、それはちよつと危険ではないかと思う。なにしろ、この近くにまだ殺人鬼がいるかもしれない。そんな奴と彩奈がはちあわせしてしまう危険を無視できるほど俺は冷たい奴ではない。森の中での死体探し。だったら、そばにいてやるよ。

「ああ、わかった。一緒に、探してみよう」
「うん」

彩奈は微笑んだ。いつの間にか降り止んだ、雨上がりの風景に映える一輪の花。そんな印象を受けるほどきれいな笑顔だった。まったく、こんな状況でなければ感動はこんなものではなかったろうに畜生め。

とにかく、なにも変なことなど起こらないようにと祈る俺であった。

「かわいそうな女の子」
人に殴られ打ち所悪く
ふらりと倒れてくたばった」

彩奈の、縁起が悪いにも程がある歌を聞きながら、傘を片手に俺達は歩く。というかその女の子、かわいそうすぎるだろ。

死体の断片を探そうにも手がかりなどまったく無い。隠すとすれば森の中、という安直すぎる発想に基づき、散歩道脇の森に入った。この地理について俺はあまり詳しくないが、彩奈の話によると、この

まままっすぐ進めば公園の敷地を出て河川敷に至るらしい。

「身寄りのないその女の子
死体を引き取る人もなく
ごろりとみちに転がされ
むっとするよな腐臭を放ち
何日もその場に捨て置かれ」

本当に嫌な歌だなおい。

「やっと出てきた引き取り手は
ここの村の村長さんで
とりあえず掘った穴に埋められた
終わり！　ねえねえ浅野君。ちょっと質問していい？」

「……なんだ？」

救いの一切無い話にげんなりしながら、俺は応えた。

「浅野君さつき、死体の見つかったてないは犯人が持って帰ったから
かもしれない、って言ってたよね？」

「ああ。そう言った」

「理由は？」

「うん？」

「犯人は、どうして死体を持って帰ったりしたのかな？」

「それは………やっぱり、食べるためとか」

「えっ？死体って食べれるの」

驚き半分、期待半分の眼差しで俺を見つめてきた。瞳がキラキラ、
というか生き生きしている。期待ってなんの期待だ。自分の趣味の
新たな境地の開拓の期待か。

「ねえねえ。死体っておいしいのかな？」

「さあ……俺は食べたことないからわからないが……おいしい、つ
て証言した犯罪者ってのはいる。食事のほとんどを人肉でまかなっ
ていた変人もいるらしい。彼は、特に上腕二頭筋を好み、フライに
して野菜と一緒に食べるとうまかった……らしい。他の事例だつた
ら、子宮を生で食べたなら甘かった、と言った奴もいた。……一般的
には、人肉嗜食者は若者とか子供を狙って食べることが多いらしい
な。特に女の子の肉は柔らかくておいしいらしい……でも、こ
れの目的は食用とは違うんじゃないかな？ 胴体はのこされていて、
内臓が持つていかれてるって……食べるにしてはちよつと変かな？
……あるいは、人間のホルモン焼きとか……なあ、この話や
めないか？」

「えー。なんでー？」

「なんか、自分が嫌になつてきた。………ていうか、なんで俺こ
んなことに詳しいんだろ……」

それは、心の中のどこかでは、こういう話が好きだから。畜生め。
「ふーん。じゃあ、他に犯人の目的ってどんなのがあるかな？」

「そうだな………殺されたのが女性ってことは、犯人は女性への
変身願望を持った男、というのが考えられるな」

「…………どうということ？」

「羊たちの沈黙って映画、観たことあるか？ 小説版でもいいが、
あの話に出てくる殺人犯で、レクター博士じゃない方の殺人の動機
がこれだ。彼は女性に変身したいがために、多くの女性を殺害、皮
膚を剥いだ。………なんというか、女性の体の着ぐるみを作ろうとし
たんだな。ちなみにこういうことをした犯罪者というのは実際に存
在して、その男は己の欲望を満たすために、死んで埋葬された女性

の遺体を墓地から掘り起こし、それを加工し弄んだ。顔の皮膚を剥いでマスクにして、夜な夜なそれをかぶって悦に入ったりしていた………なあ、この話もやめないか？」

「えーっ。いいところだったのに」

「いいところってなんだよ………」

まあ、彩奈にとってはものすごくいい話なのかもしれないが。だが、その話をさせられるこっちの身にもなってほしかったり。

「それで結局、犯人の目的ってなんだろうね？」

「さあな………」

他には特に理由は思いつかない。なんとなく、知っている猟奇事件を思い浮かべてみた。死体の一部を持ち帰る理由………、

「………あ、もうひとつあった」

「え？」

「国内で起こった、わりと有名な事件だから逆に気付かなかった。盲点だな。阿部定っていう女性が起こした事件で………」

「………あ」

「うん？」

彩奈が声をあげた。なにかに気付いた風だ。と言っても、俺の言わんとすることの察しがついたわけではなさそうだ。

なんだか、熱心に俺の足元を見つめていらっしやる。最高に目を輝かせながら、だ。

まさか、と、嫌な予感を覚えつつ自分の足元に目を向けた。

「………本当に、見つかったね」

「………ああ」

地面の上に球体ひとつ。

そこに、少し血で汚れた眼球がひとつ、転がっていた。

彩奈は小さく歓声をあげ、しゃがんで眼球を間近で観察し始めた。まあ嬉しいのならそれでいいのだが。

それにしても、なぜこんな場所に眼球が？いや、眼球とはいえ死体を探していたのは俺達なのだが。

そしてなんだか嫌な予感がして、まさか他にもなにか落ちていないだろうなと思って、俺はまわりを見渡した。そして見た。見てしまった。

何を？ 死体ではない。もつとひどい。

小太りの中年男が驚愕の表情で俺達を見つめていた。その手には、肌色の太い棒。それは柔らかそうで、両端が赤く汚れていた。

人間の、切断されたふくらはぎにしか見えなかった。

「なんだよこれは……………」

誰にも聞こえないような小声で俺は悪態をつき、目の前の男を睨んだ。彩名はそれに気付いた様子はなく、指先で眼球をつついて転がして遊んでいる。

男をよく見ると、手に血のべったり付いたのこぎりを持っていた。なにがあったのか、想像するのは難しいことではない。

「おい……………」

しばらく睨み合った後、俺はできるだけ声にどすをきかせて話しかけた。軽い威嚇のつもりだったが、男はひっ、っと悲鳴をあげて一歩後ずさった。

俺の様子のおかしいことによやく気付いた彩名に、じっとしてると小声で言っつて、再び男と向き合う。言っべきことは決まっつている。

「………… お前が、殺したのか？」

答えのわかりきった、だが必要な問い。

「お前が殺して、その、のこぎりで死体を解体したんだな？」

男の顔はみるみるうちに真っ赤になっつて、だらしなく半開きになっつた口はわなわなと震えている。

……さて、これからどうするべきだろう？この男が殺人犯だというのは確定として、どう行動すべきか？とりあえず彩名の安全は確保しないといけない。それから？こんなキチガイ、相手にせず逃げるのが得策だろうが、そうすると殺人鬼を野放しにすることになる。さて……………

「う……………うるさいぞっ！ボクは人殺しなんかじゃいからなっ！」
……………おや？ デブがなんか言ってるぞ？

「ボクはずっとマユちゃんと一緒にいるんだからな！殺しなんかしてないっ！」

なるほど。マユちゃんか。おそらくそれが、そのふくらはぎの持ち主だったのだろう。

「殺していない、だと？」

もう一步、前に踏み出した。

「そんなことあるわけないだろ——お前は、ひとりの女性を殺し、ノコギリでバラバラにして撒き散らした。この眼球もそう。そのふくらはぎも、これから捨てるつもりで——」

「違う！ 捨てないっ！ ボク達はずっと一緒に暮らすんだ！ マユちゃんを殺すはずないじゃないか！」

デブはまだしつこく意味不明な主張を続ける。その必死な様子から、不気味さまで覚えてしまった。なんなんだこいつは……………

——どうして死体を持って帰ったりしたのかな？

「！」

彩奈の言葉が脳裏に浮かび、頭の中で何かが繋がった。

「お前……………」

この男が犠牲者のふくらはぎを持っている。なぜか？ その答えはあまりにも簡単だ。

一九三六年、当時の日本を大きく騒がせた事件が起こった。
東京にあるとある休憩所で男の死体が見つかった。その死体には
数力所に刃物で彫ったと思しき文字があり、さらに奇妙なことに、
局部が切り取られ持ち去られていた。

容疑者は、阿部定という名前の女性で、殺された男の恋人だった。
許されない愛を捨てきれずに駆け落ちしたふたり。互いに求め合
い、愛し合った末に殺してしまったという。死体の一部を持ち去っ
たのは、好きな男を永遠に忍ぶためだろうか？

世にいう、阿部定事件の概要である。

「お前は……殺された女性のことが好きだった。ちがうか？」

そろそろと相手に近付きながら、頭の中で組み立てた仮説を言う。
それにあわせて、向こうも後ずさっている。

「相手の女性がお前を好きだったかどうかは知らないが、たぶん……
愛し合うなんてことはなかったと思っっている……お前はそんな女
性に腹が立ち、殺した。それから死体を解体してから……」

ちらりと、捨ててあった眼球に目を向けた。

「それから、バラバラの地点に捨てた。捜査の攪乱のためじゃない
な。バラバラにしていれば、死体の一部が見つからないとしてもお
かしくはない。……探されはするだろうけどな」

もともと良くなかった男の顔色が、さらに蒼白になっていく。

「で、お前のほしいものはその死体の一部だ。そのふくらはぎか？」
証拠はないが、状況から見てこれで正解だろう。案の定男はガタ
ガタと震えている。

怖いのはこつちも同じだ。すぐにも逃げ出したい気持ちを必死
に押さえつける。

「お前にとっての『マユちゃん』というのは、その人自身じゃなく

……その人のふくらはぎだった」

フェチズムに似たなにかなのだろうか。女性のふくらはぎにしか興味を持たないという性癖。

「最初から殺すつもりはなかったんだろう？ その女性があんたを受け入れられれば、普通の恋愛になっていたかもしれない。でもそれは叶わず、あんたは拒絶された」

不幸というか不条理だ。被害者の女性も、この男がそこまでの気違いだとは思ってなかったのだろう。

結果として、男は力づくで女性をものにすることを選び、しかもほしかったのはふくらはぎだけだった。女性を殺したこの男は、遺体を解体し必要な部分以外はバラバラに捨てた。それは捜査のかく乱を狙ったことだ。そして捨てる作業をしているまさにその途中で、俺達の死体探しに出くわしたわけだ。

「なあ、それでどうするつもりだったんだ？ そのふくらはぎを家に持ち帰って……ずっとそれを愛するつもりなのか？ 心を持たず、腐りゆくだけのそのふくらはぎを」

「うわああああああああああ！ うるさあああああああああああいいいいいいいいいい！」

男が突然叫んだものだから俺は口をつぐんだ。今までの小心者な様子からは予想できなかった絶叫。やけになつての行動か。

「ああああああ！ マユちゃんは死んでないいいいいいいいい！ あああああああああああ！」

突然、男のこぎりを振り上げ襲い掛かってきた。

「！ くっそ！」

真上から降ってくるのこぎりの刃。咄嗟に傘で防御した。ぶつかり、はねかえるのこぎり。男が再度のこぎりで切りつけようとしてきたため、俺は傘の先で男の手を突いた。静かにのこぎりが落ちて、男はよろよろと二、三步後ろに下がり、

「あ……ああ………」

生気の無い目ではらくこちらを見つめていたかと思うと、

「あああああああ！」

ひととき大きな声をあげて、俺達に背を向けて逃げ出した。この期に及んでふくらはぎを手放さないのはさすがと言ったところか。

「あ、待て！」

追いかけたのは反射的な行為。これが正しい行動なのかはわからないが、とにかく追いかけた。背後で、彩奈も付いてきているのがわかった。

木々の間を抜け根を飛び越え、森の中での追いかけてを演じる俺と男。これはいつ終わるのか？

彩奈はなんて言っていた？ この森を抜けた先にあるものは？

不意に周りが明るくなった気がした。森を抜け、木々に遮られていた日の光が降り注いだ。雨を降らせていた雲はいつの間にか流されていて、太陽が顔をだしている。この森を抜けた先にあるのは、そう、河川敷だ。

コンクリートの坂の下に青々とした芝生。そして川。

ただでたらめに走っていたらしい男は勢いのまま河川敷に突っ込み、コンクリートで足を滑らせて坂を転げ落ちた。俺はというと、すんでのところで止まることができた。ふくらはぎを手放すこともなく落ちる男は、最後にゴン、ボキっといやな音を立ててそれっきり動かなくなった。

なにが起こったかは想像するに難くない。頭を下にしてコンクリートにぶつけ、その体重に首が耐えきれなかったんだ。

面倒な事になったかなと思いつつ、坂を下る。男はふくらはぎを抱きしめたまま、うつすらと笑みを浮かべていた。首に手をあてる脈が無い。

「死んだの？」

彩奈が後ろから声をかけてきた。

「ああ、そうだ。死んでる」

「浅野君が殺したの？」

その声はいつになく不安そうだ。しかしそれは杞憂というもので、「大丈夫だ。この男が逃げて俺が追いかけたことと、この男が足を滑らせて死んだことには、法律的には因果関係はない。ただの、不幸な事故だ。俺にはなんの責任もない」

その通り、俺が逮捕されるなんてことはありえない。彩奈も安堵の表情を浮かべる。が、

「それでも、死体を放っておくわけにはいかないか。警察に連絡すべきだな」

これは市民の義務だ。俺はポケットから携帯電話を取り出して、110番を押そうとして、

「ねえねえ、ちょっと待って」

彩奈に止められた。

「なんだ？」

「もうちょっとだけ、このままにしててもいいかな、その……えつと……」

「死体を、か？」

こくんとうなづく彩奈。その仕草がいちいち可愛くて、俺は無意識のうちに許可の言葉を発していたようだ。彩奈の顔がみるみる明るくなる。

いいさ。好きなんだろ。だったら飽きるまで眺めて、触ってればいい。

死体にとびついて、指先でつついたり至近距離から観察したりする彩奈の様子を、俺は一步さがって見つめていた。うん。楽しそうだ。自分の趣味をなかなか言い出せない女の子の、至高のひとつとき。その光景は、ただひたすらに美しかった。晴れ渡る空の下、俺は時間を忘れて好きな女の子の姿を見つめるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9435t/>

ふたりで宝探し

2011年6月9日13時25分発行